

第 2 章 集計の概要

1. 集計の対象

(1) 罹患日の期間

2016年1月1日から2016年12月31日まで

(2) 調査の期間

届出票受領期間：2016年1月1日から2019年12月31日まで

遡り調査期間：2018年10月22日から2018年11月22日まで

(3) 集計日

2020年5月1日

(4) 集計対象となるがん

第1章 3. 『届出対象となるがん』と同一である。

(5) 精度指標

MI比：0.40

DCI割合：6.0%

DCO割合：4.4%

MV比：85.9% HV比：82.9%

2. データ収集状況

(1) 届出票

2016年診断症例の届出票は、総計163,781件であった(重複、対象外を含む。)。そのうち、96.1%を診断年翌年末までに受領している。

図2-1 届出票（2016年）受領状況

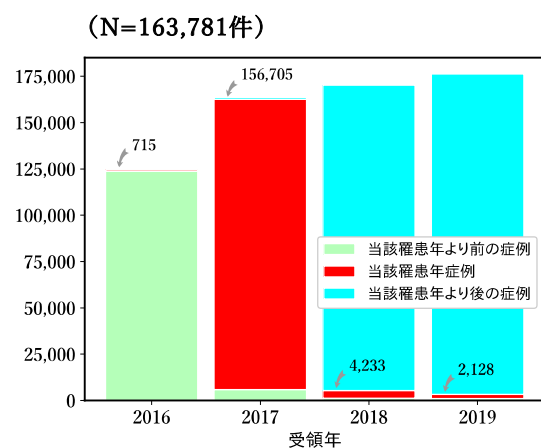
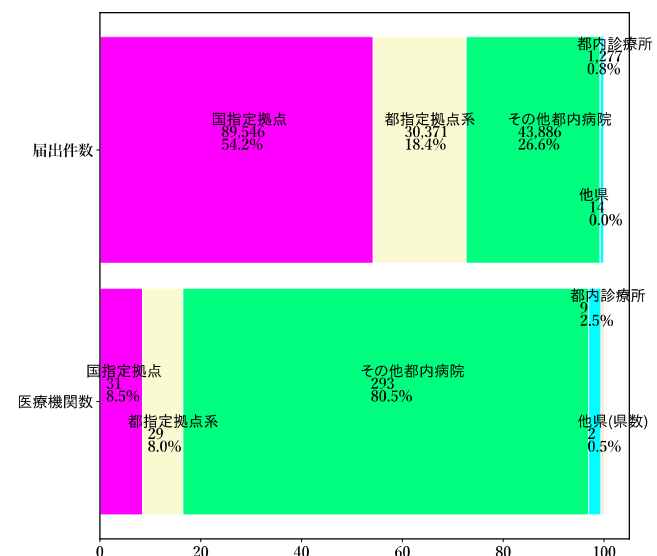


図2-2 届出票（2016年）医療機関別件数



(2) 死亡票

全国がん登録事業では、死亡票は法定業務として国が一括して取り扱うこととなったため、東京都がん登録室では、2016年以降の死亡票の収集は行っていない。

(3) 遡り調査票

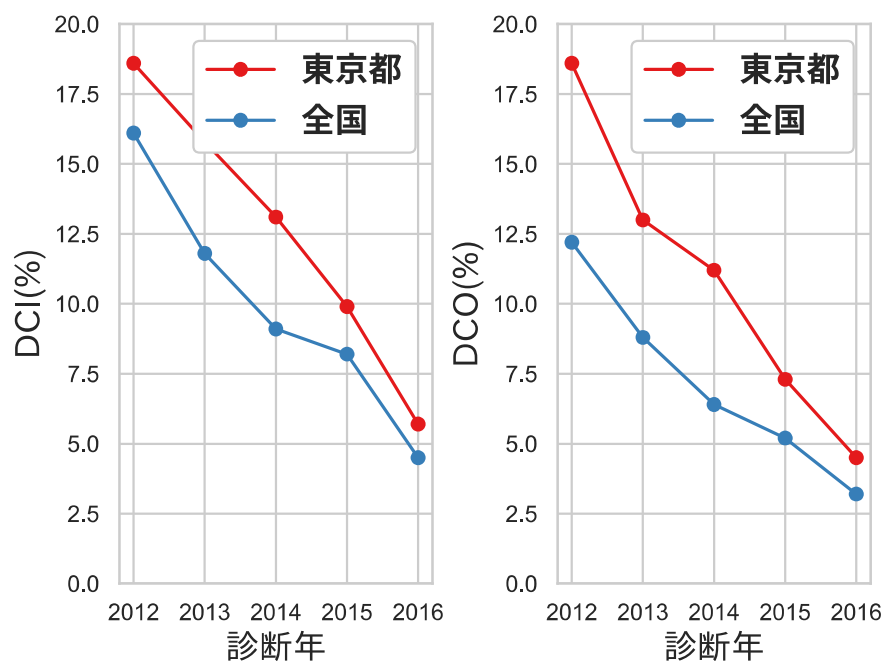
2016年遡り調査対象は、5,568件（527病院）であった。遡り調査に対する回答は4,658件（全遡り調査に対する回答率83.7%）、403病院（同76.5%）であった。

(4) がん登録の精度

①DCOの改善状況

東京都のがん登録は地域がん登録から通算して本報告は5年目のものであるが、この5年の間のがん登録の精度の向上について、DCI及びDCOの推移を図2-3に示す。DCIやDCOは時間の推移と共に変わるため、DCIやDCOの比較は全国集計の時期(地域がん登録では「全国がん罹患モニタリング集計」、全国がん登録では「全国がん登録罹患数・率報告書」発行時期：おおよそ東京都のがん登録報告書の1年程度前)の数値で示した（東京都のがん登録の数値とは異なることに留意）。

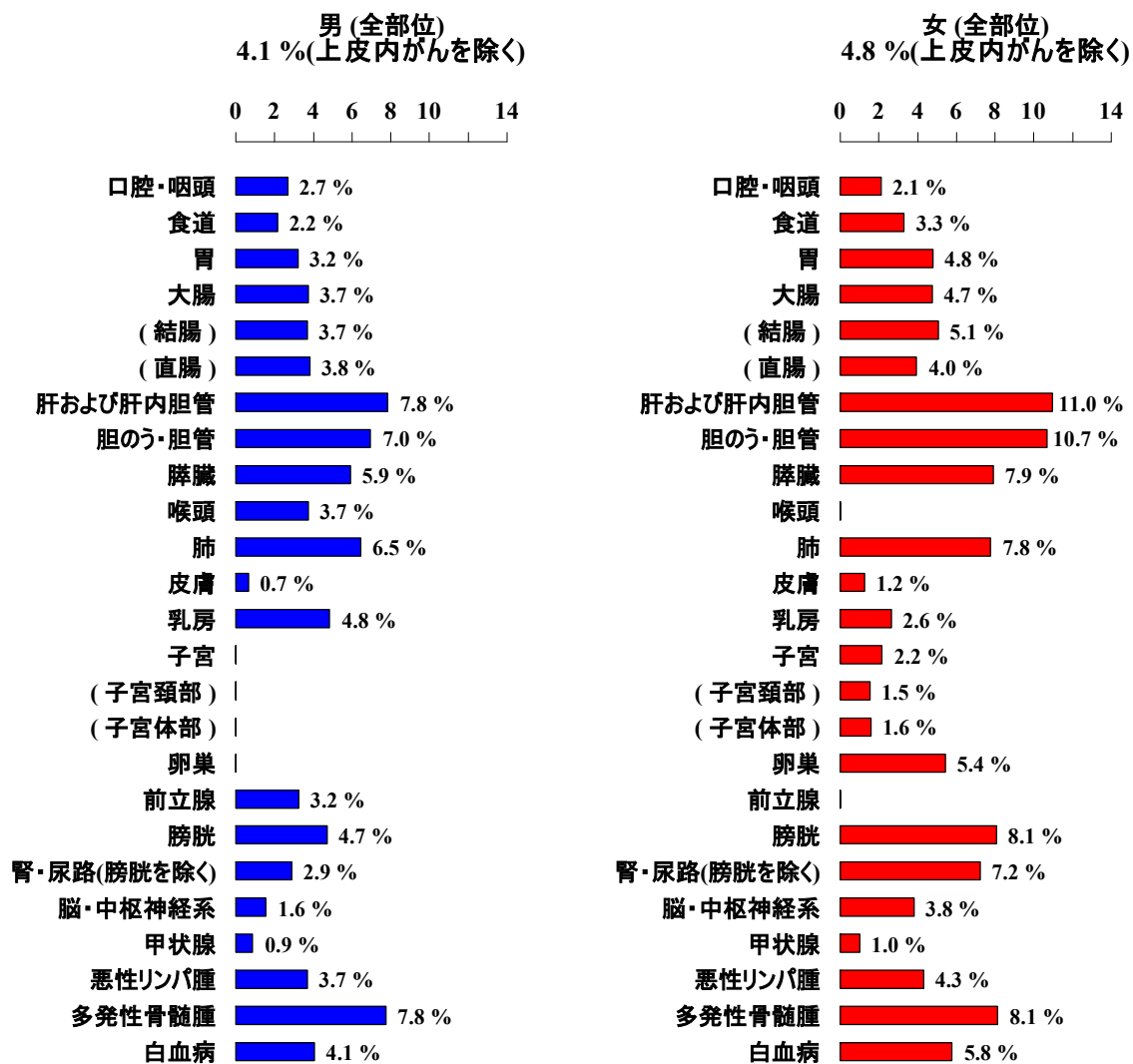
図2-3. DCI, DCOの推移



②部位別・性別DCOの違い

DCOが低いのは、男では、皮膚、甲状腺、中枢神経、食道、口腔・咽頭など、女では、甲状腺、皮膚、口腔・咽頭、子宮、乳房などである。逆にDCOが最も高いのは男女とも肝および肝内胆管であり胆のう・胆管は男では3番目、女では2番目に高い。

図2-4 部位別・性別DCO（2016年）（上皮内がんを除く）

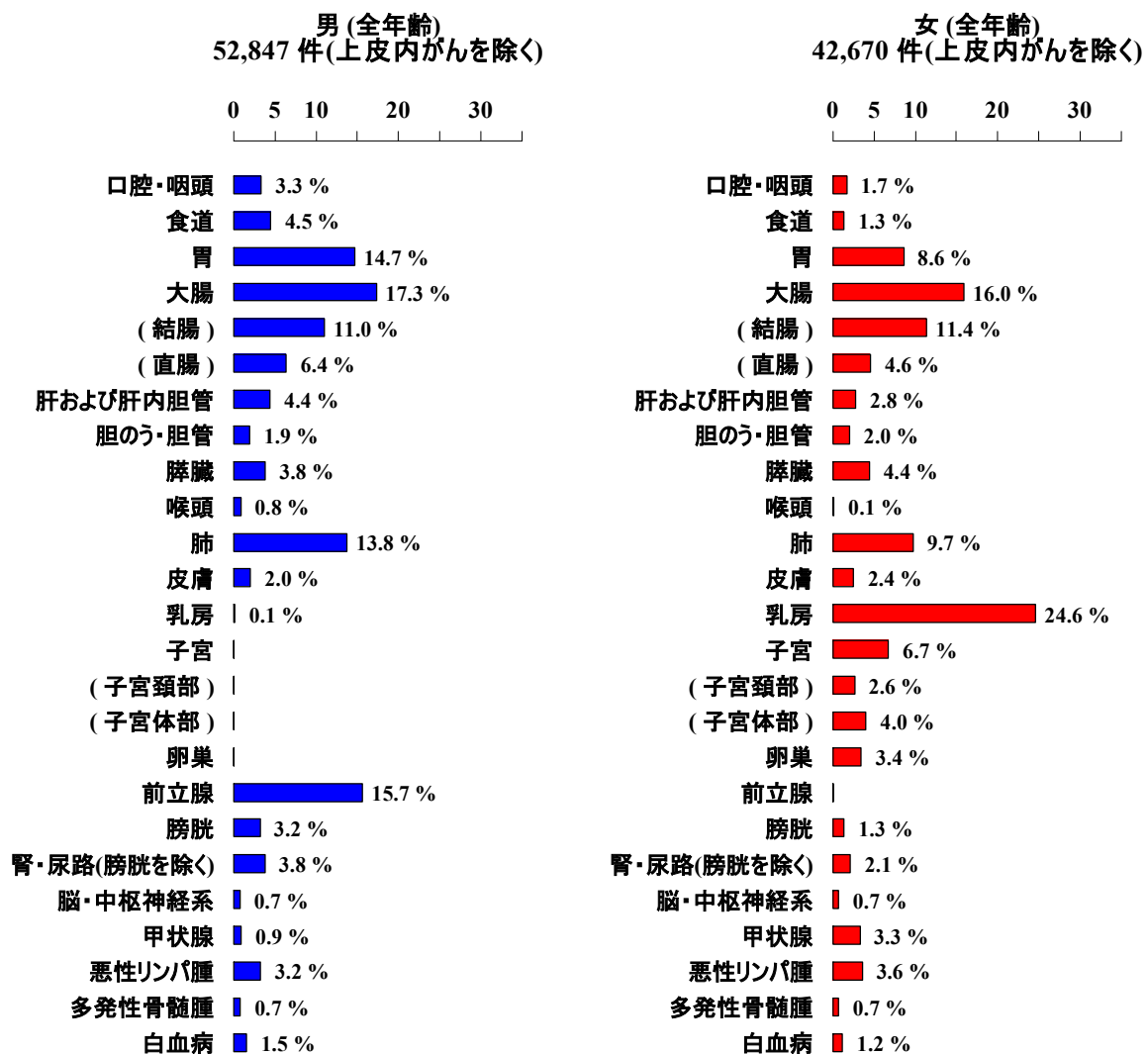


3. がん罹患の概要

(1) 部位別・性別罹患数（表3-1-A/B）

届出票と死亡票の情報を集約したがん罹患数は、上皮内がんを除いた場合、男性52,847件、女性42,670件で、男女計で95,520件であった。上皮内がんを含めた場合、男性58,121件、女性49,549件で男女計107,673件であった。上皮内がんを除いた、男性の最も多い罹患部位は、大腸（結腸、直腸）（17.3%）であり、前立腺（15.7%）、胃（14.7%）、肺（13.8%）、食道（4.5%）と続く。女性の最も多い罹患部位は、乳房（24.6%）であり、次いで、大腸（結腸、直腸）（16.0%）、肺（9.7%）、胃（8.6%）、子宮（子宮頸部、体部）（6.7%）と続く。

図2-5 部位別・性別罹患件数・割合（2016年）（上皮内がんを除く）（年齢不詳を含む）



(2) 年齢別がん罹患 (表 3-2-A/B、3-3-A/B)

2016年のがん罹患数(上皮内がんを除く)の年齢別の内訳を見ると、65歳以上が、男性76.3%、女性63.5%を占めている。一方、40~64歳は、男性が21.6%であるのに対して、女性は31.7%となっている(図2-6)。

罹患数は、男性は対女性比で23.9%(10,177件)多いが、生産年齢人口の対象となる15~64歳に限ると女性は対男性比で24.9%(3,903件)多い。これは、この時期に女性の乳房と子宮に発生するがんが多いためである(図2-7)。

年齢階級別罹患率を見ると、男女とも年齢とともに罹患率は上昇するが、特に50歳を超えると上昇する。また、10歳代後半から50歳代前半の間は、女性の方が男性より罹患率は高く、それ以外の年齢階級では、男性の方が高い。

部位別に見てみると、女性の場合、乳房は30歳代後半から、子宮頸部は上皮内がんを含めると、20歳代から30歳代にかけて上昇している。年齢のピークは、乳房では、40歳代から60歳代にあり、40歳代と60歳代の二峰性である。子宮頸がんは上皮内がんを含む場合、30歳代から40歳代前半がピークである。食道は、男性の場合のみ、70歳代がピークとなっている(図2-8)。

図 2-6 がん罹患年齢群別内訳 (2016年) (年齢不詳を除く)

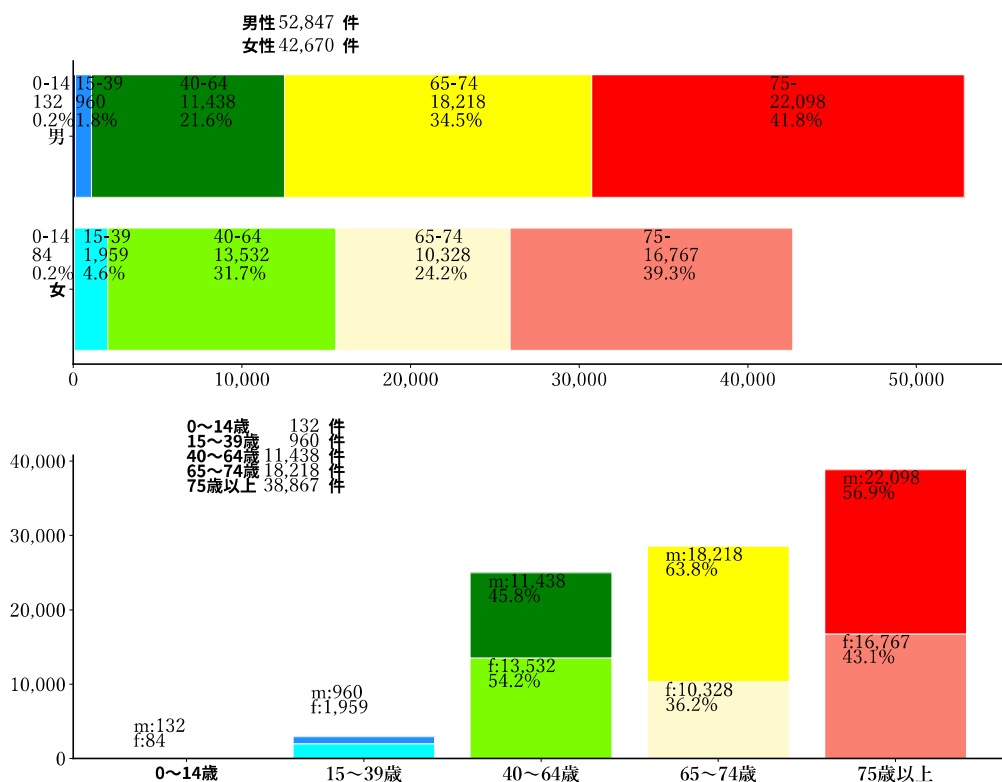


図2-7 がん罹患年齢群別部位別内訳 (%) (2016年) (年齢不詳を除く)

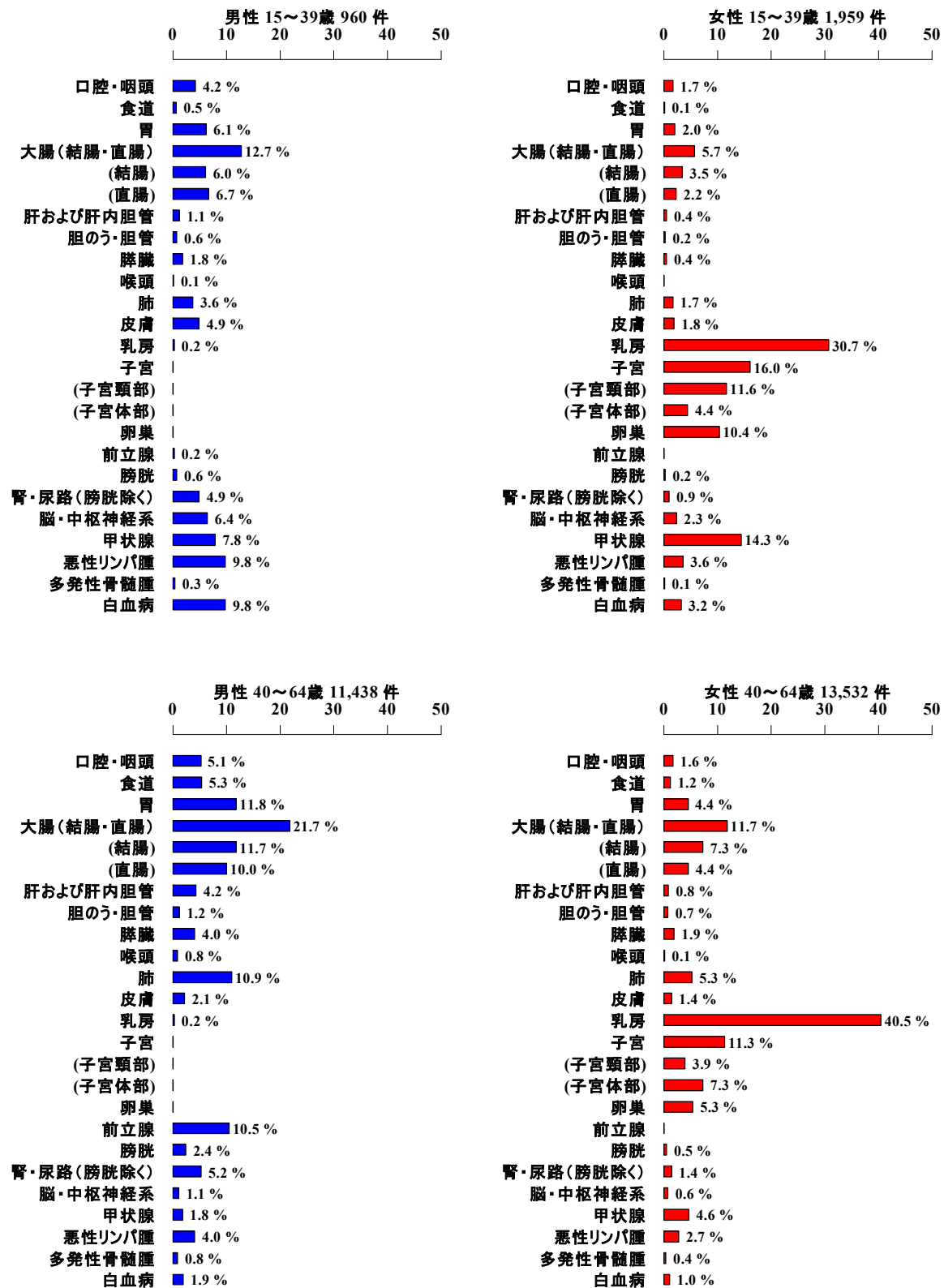


図2-7 がん罹患年齢群別部位別内訳 (%) (2016年) (続)

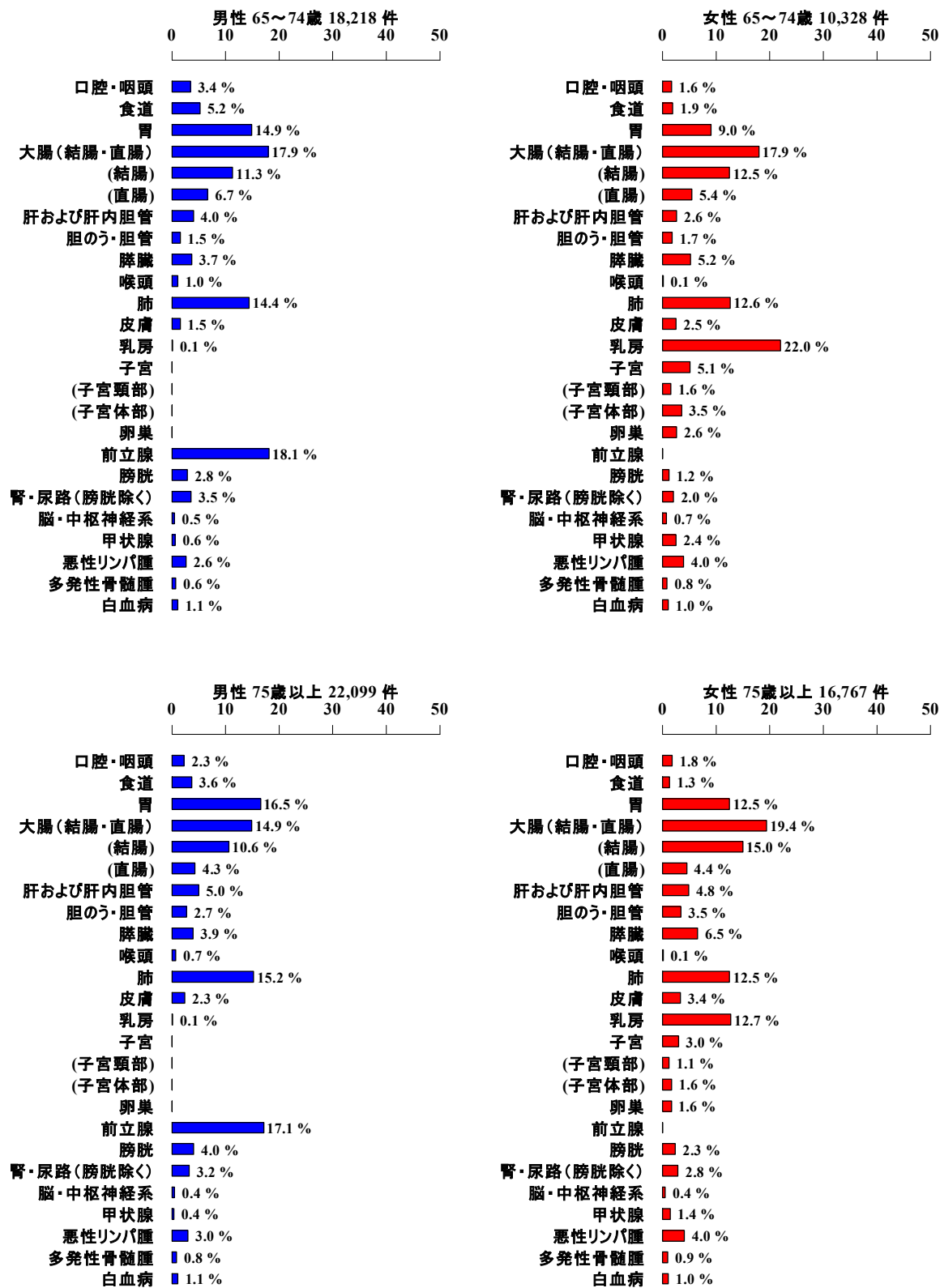


図2-8部位別年齢階級別罹患率（2016年）：人口10万対

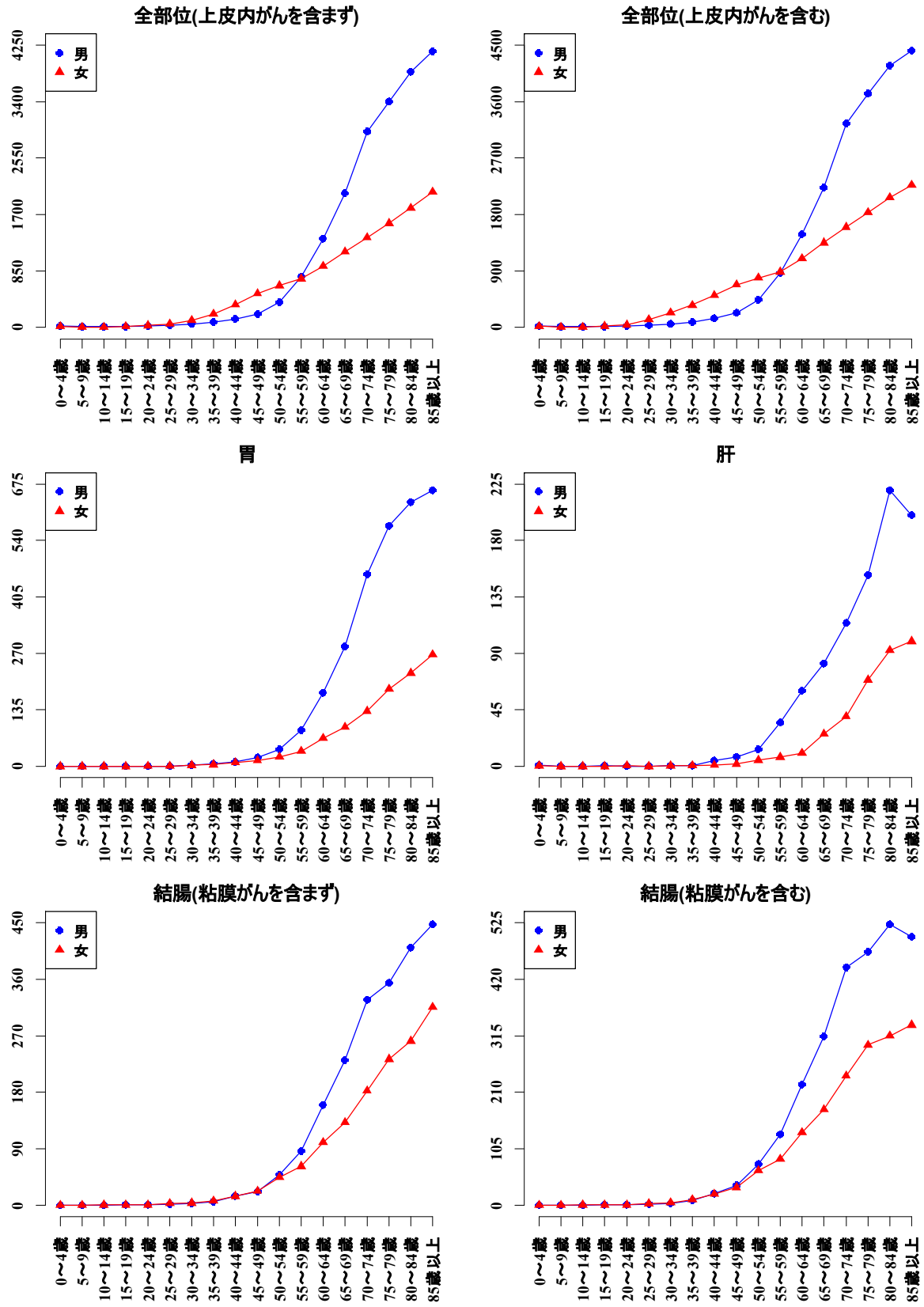


図2-8部位別年齢階級別罹患率（2016年）：人口10万対（続）

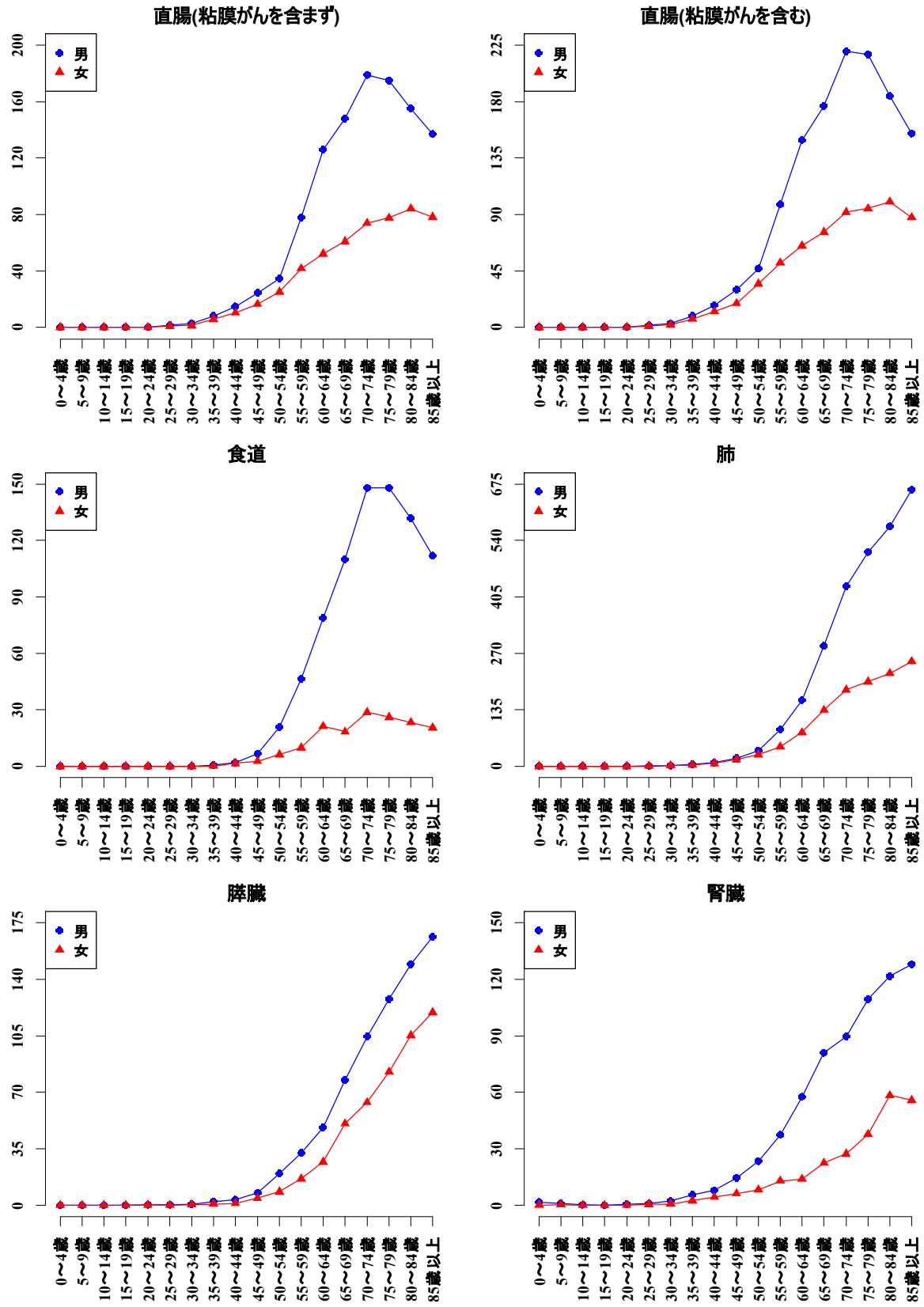
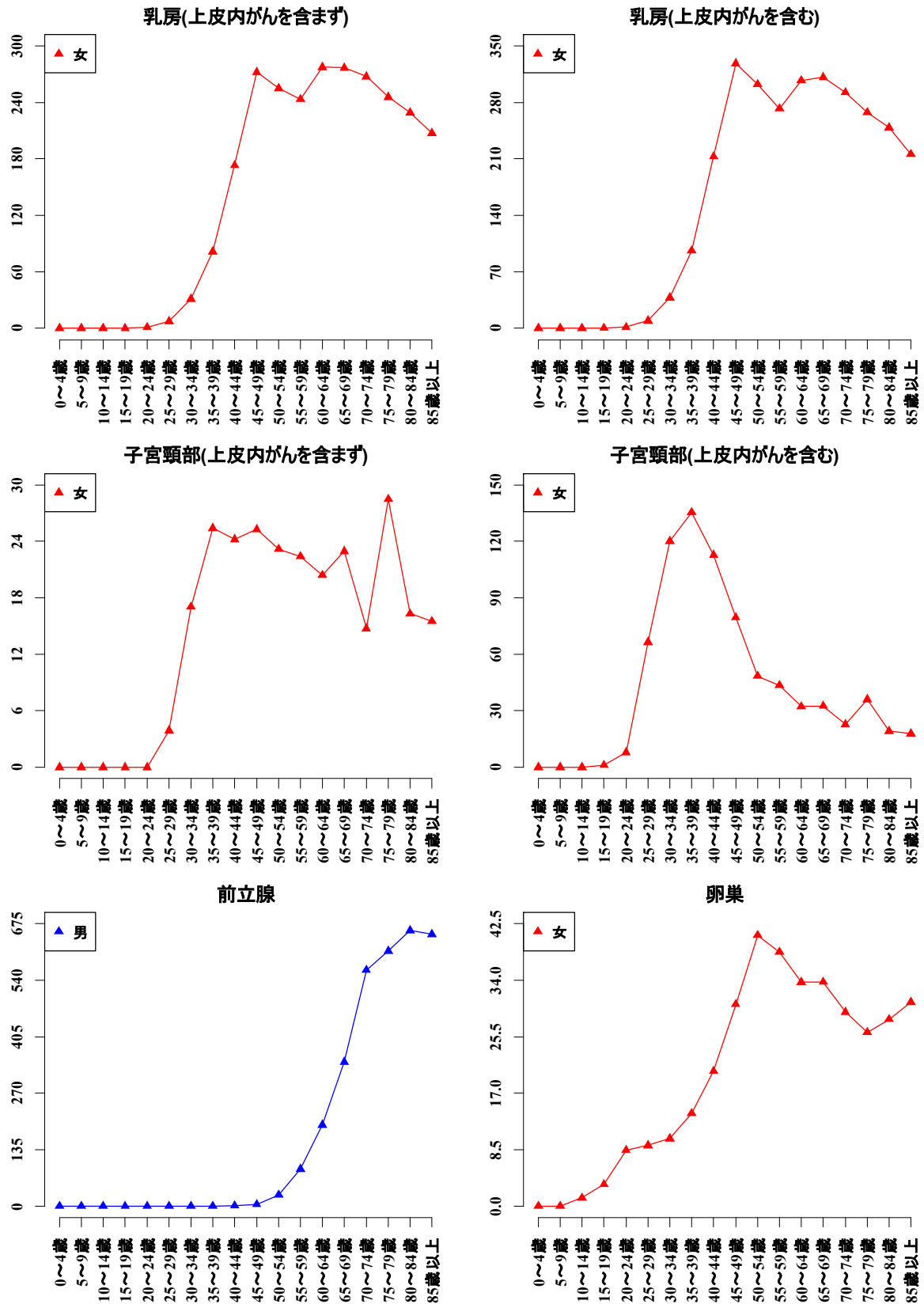


図2-8部位別年齢階級別罹患率（2016年）：人口10万対（続々）

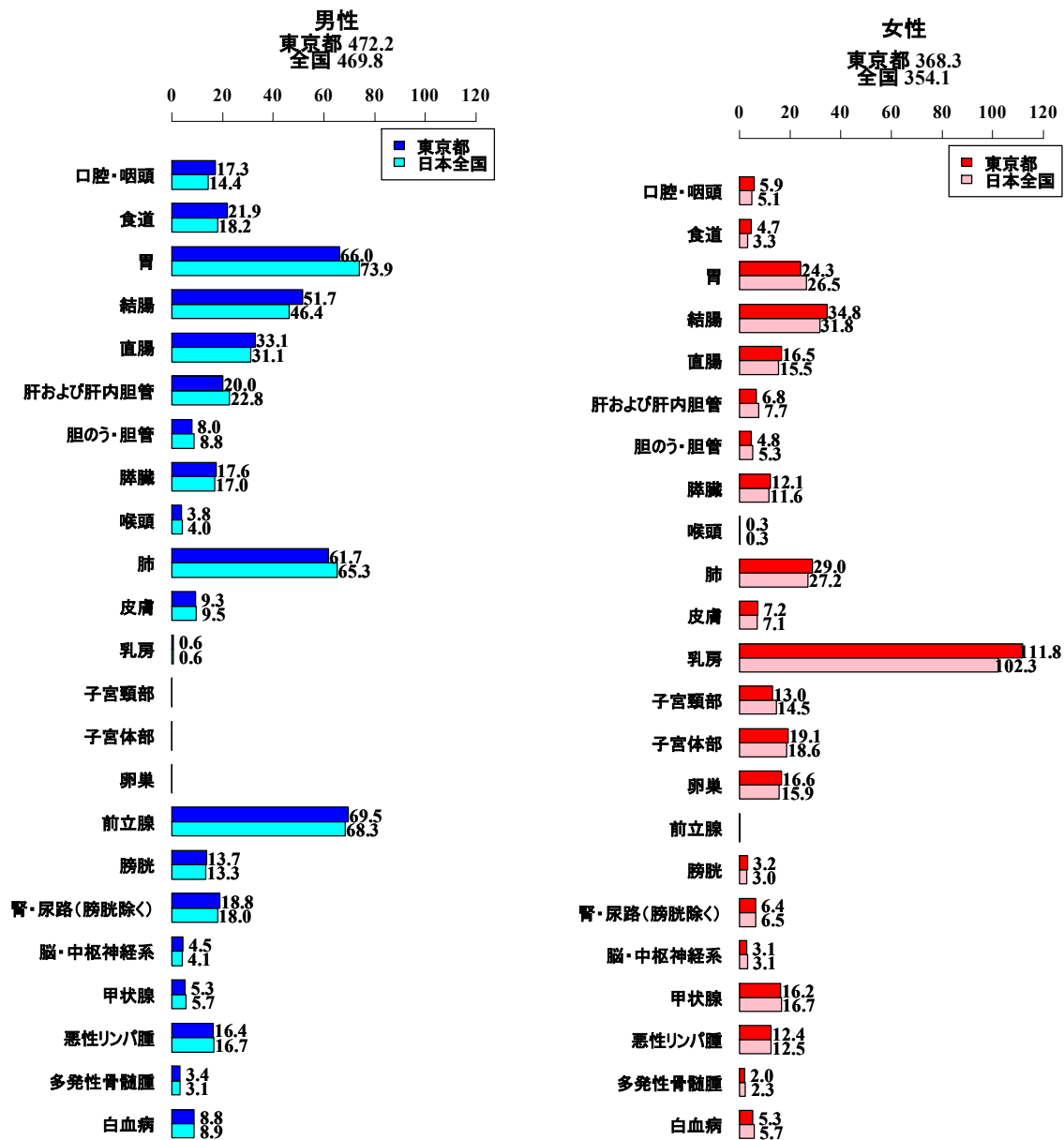


(3) 年齢調整罹患率（2016年）（表3-1-A）

東京都の年齢調整罹患率（上皮内がんを除く、昭和60年日本人口モデルに基づく）は、人口10万人当たり、男性472.2、女性368.3である。全国推計値は、男性469.8、女性354.1であるので、いずれも東京都の方が高い。

部位別では、男女ともに全国と比してお概ね同様の傾向を示しているが、男性は胃が低く、女性は乳房が顕著に高い特徴がある。

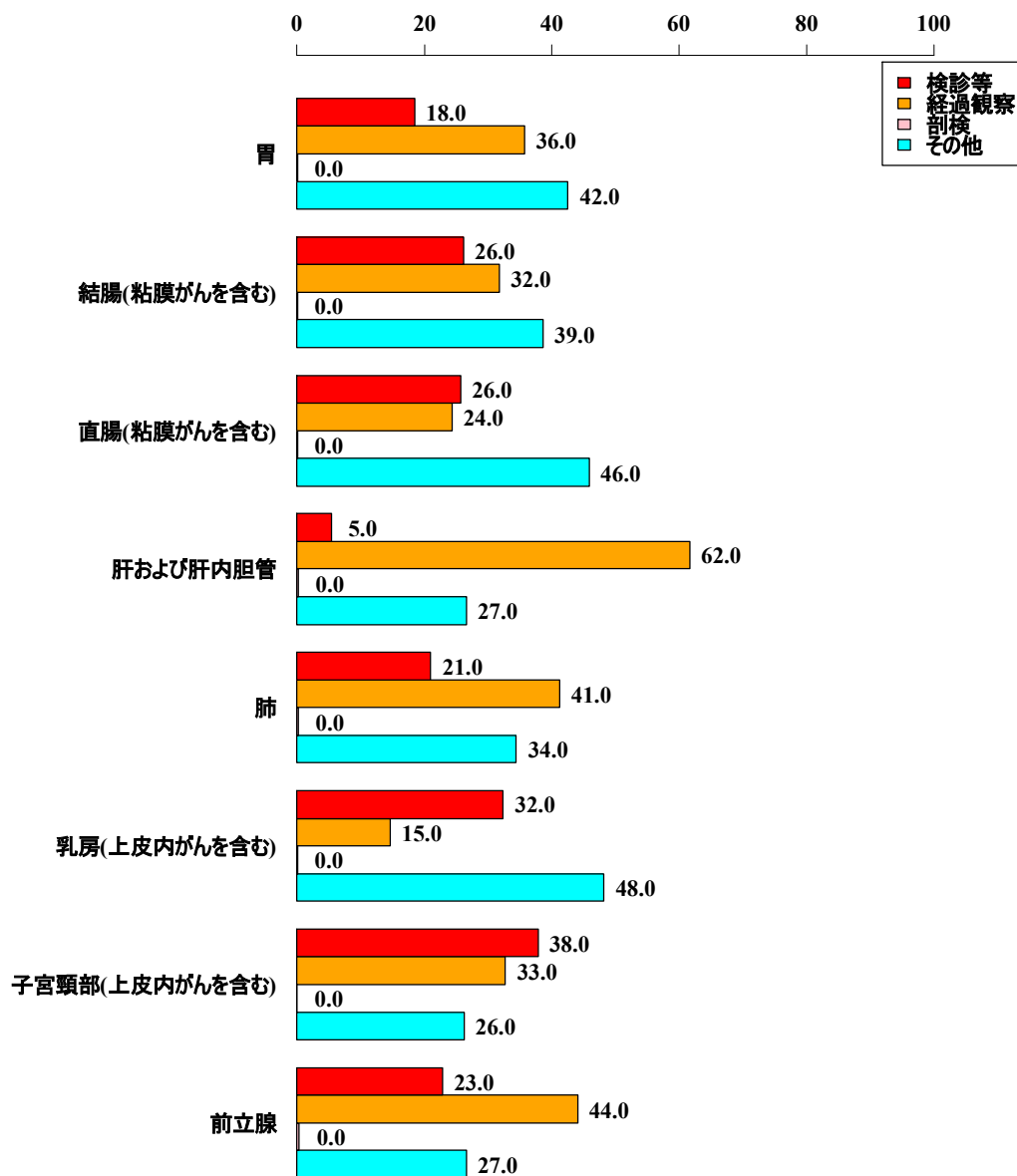
図2-9 部位別がん年齢調整罹患率（2016年）：人口10万対（全国推計値との比較）



(4) 発見経緯（表3-4-A/B）

検診等（がん検診、健康診断、人間ドック等）が発見経緯になる部位は、男女合わせてみると子宮頸部、乳房における割合が高い。また、肝および肝内胆管で経過観察の割合が高い。

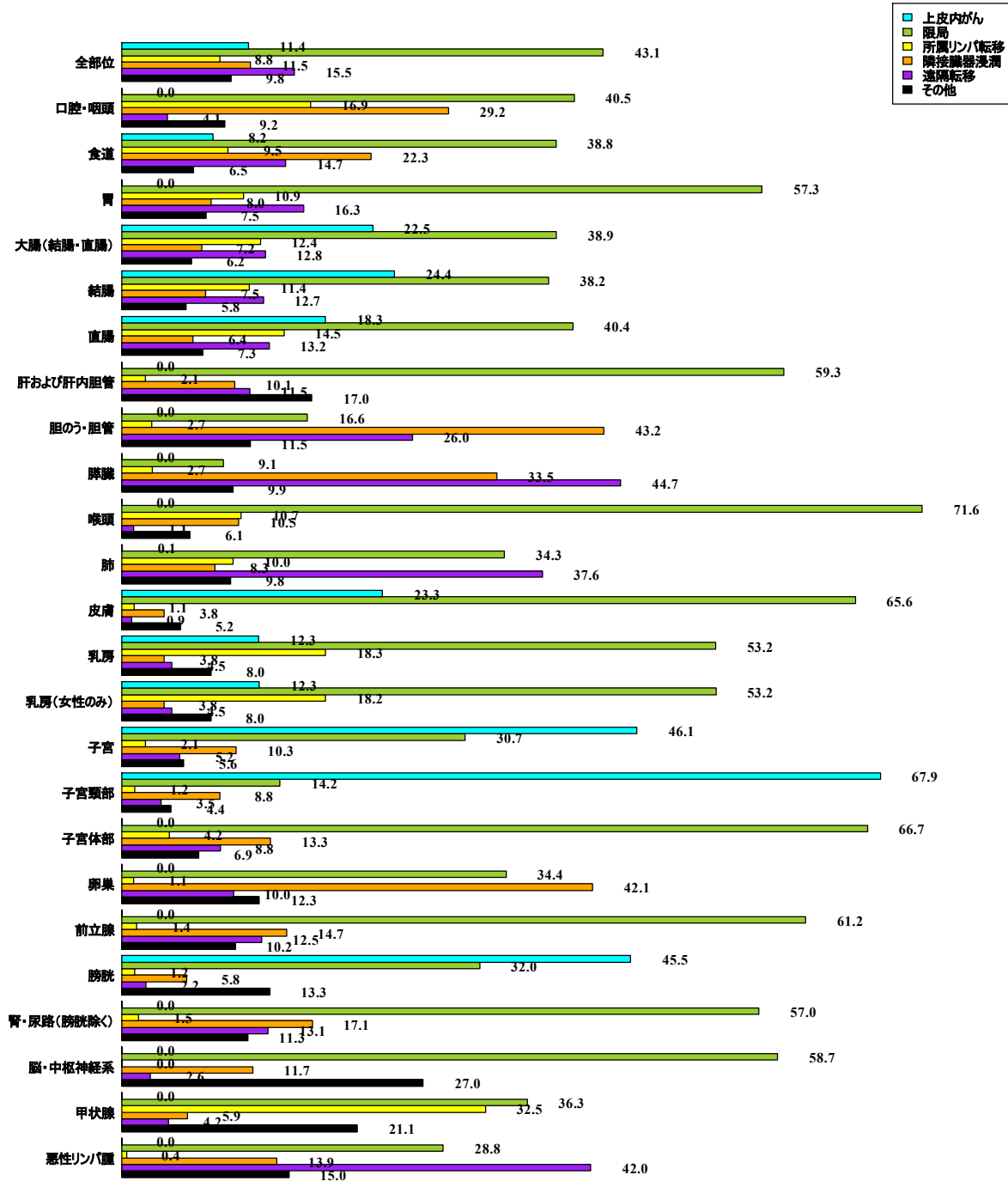
図2-10 部位別発見経緯割合（％）（2016年）（DCO症例を除く）



(5) 病期 (表3-5-1-A/B)

中枢神経、甲状腺、悪性リンパ腫以外で、所属リンパ節転移以上の進行状態で診断される割合の高い部位は、膵臓、胆のう・胆管、卵巣、肺であるが、膵臓と肺は遠隔転移の割合が高く、胆のう・胆管や卵巣は、隣接臓器浸潤が高い。

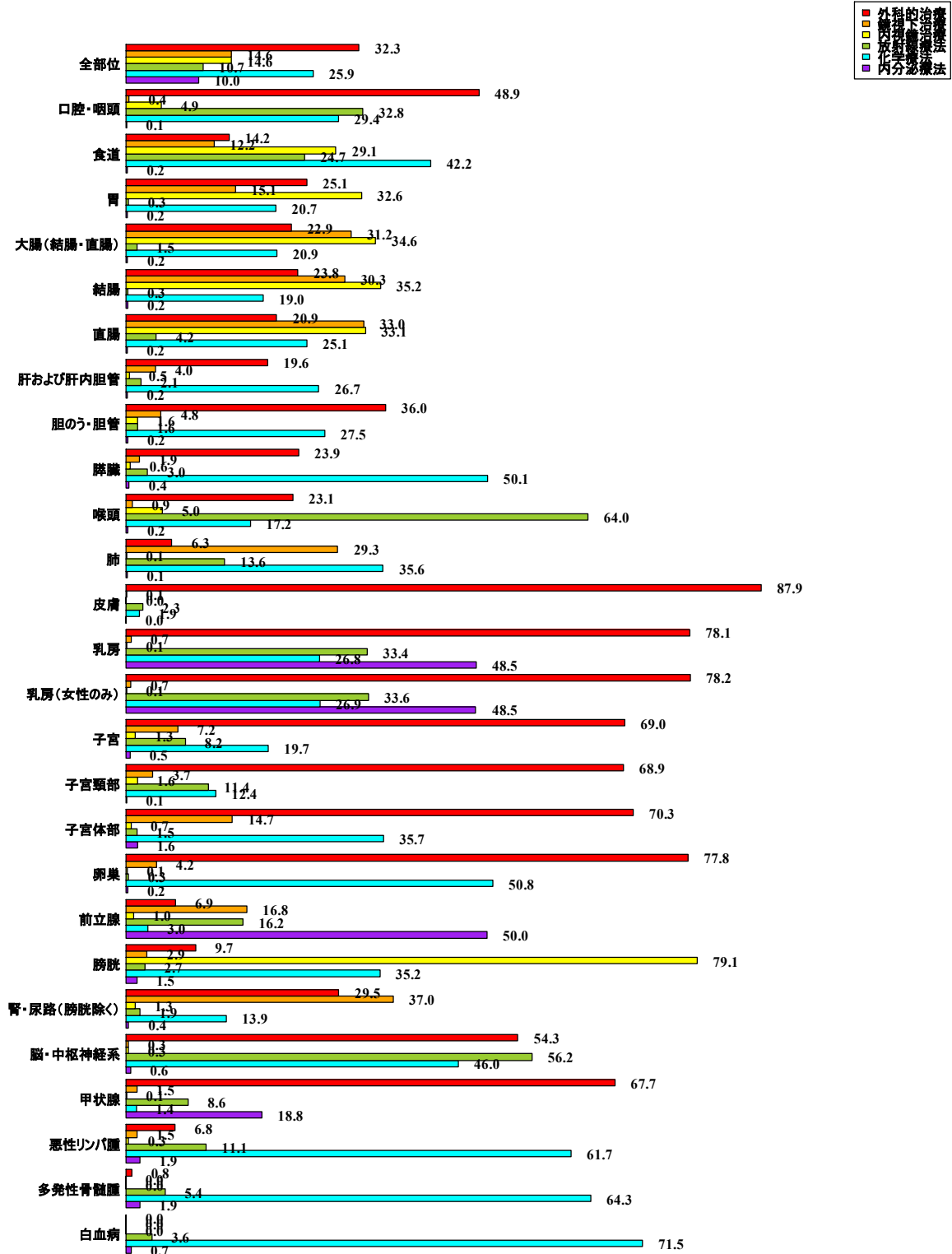
図2-11 部位別発見時病期割合 (%) (2016年) (DCO症例を除く)



(6) 初回治療内容 (表3-6-A/B)

造血器腫瘍（悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、白血病）以外で薬物治療（化学療法+内分泌療法）の割合が高いのは、乳房、前立腺、卵巣、膵臓、食道である。また、放射線治療の割合が高いのは、喉頭、脳・中枢神経系、乳房、口腔・咽頭、食道である。

図2-12 初回治療内容（上皮内がんを含む）（%）（2016年）（DCO症例を除く）



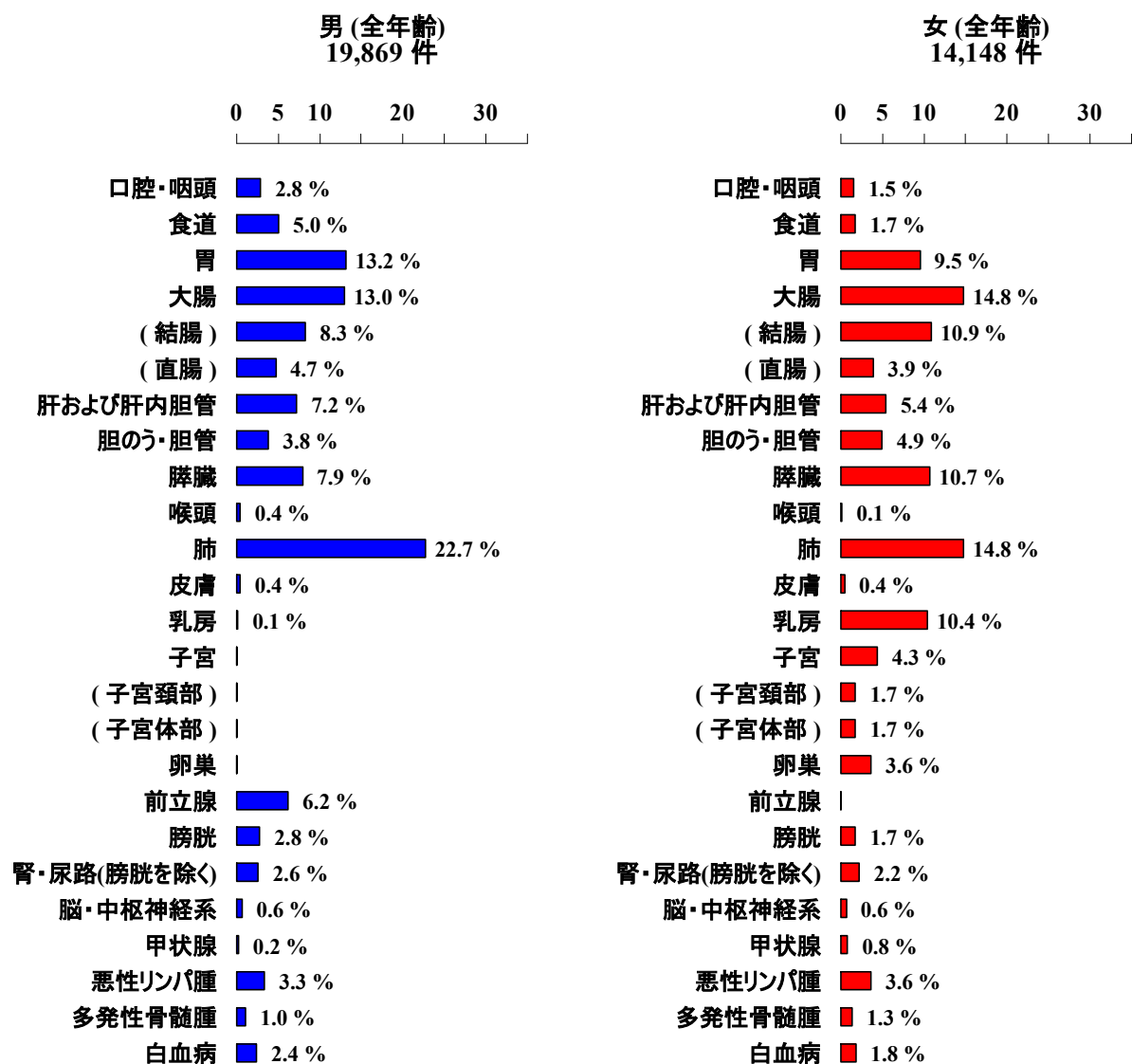
4. がん死亡の概要

(1) 部位別・性別がん死亡数（表3-9）

東京都において、2016年にがんによって死亡した者の数は、男性19,869名、女性14,148名、男女計34,017名である。

がん死亡数を部位別に見た場合、男性は、肺、胃、大腸、膵臓、肝および肝内胆管の順に多く、女性は、肺、大腸、乳房、胃、肝および肝内胆管の順に多い。

図2-13 部位別・性別がん死亡件数・割合（2016年）（年齢不詳を含む）



(2) 年齢別がん死亡（表3-10/11）

2016年がん死亡の年齢別内訳を見ると、65歳以上での死亡が男性85.4%、女性83.8%と、ともに8割以上を占めている。一方、40～64歳は、男性で13.9%、女性は15.2%を占める。がん死亡数は、男性は対女性比で40.4%（5,721名）多い。

年齢階級別死亡率（図2-15）を見ると、男女とも年齢の上昇とともに増加するが、50歳を過ぎる頃から更に上昇する傾向にあり、中でも女性の場合、乳房・子宮は、20歳代後半から死亡率が上昇する。

図2-14 がん死亡年齢群別内訳（2016年）（年齢不詳を除く）

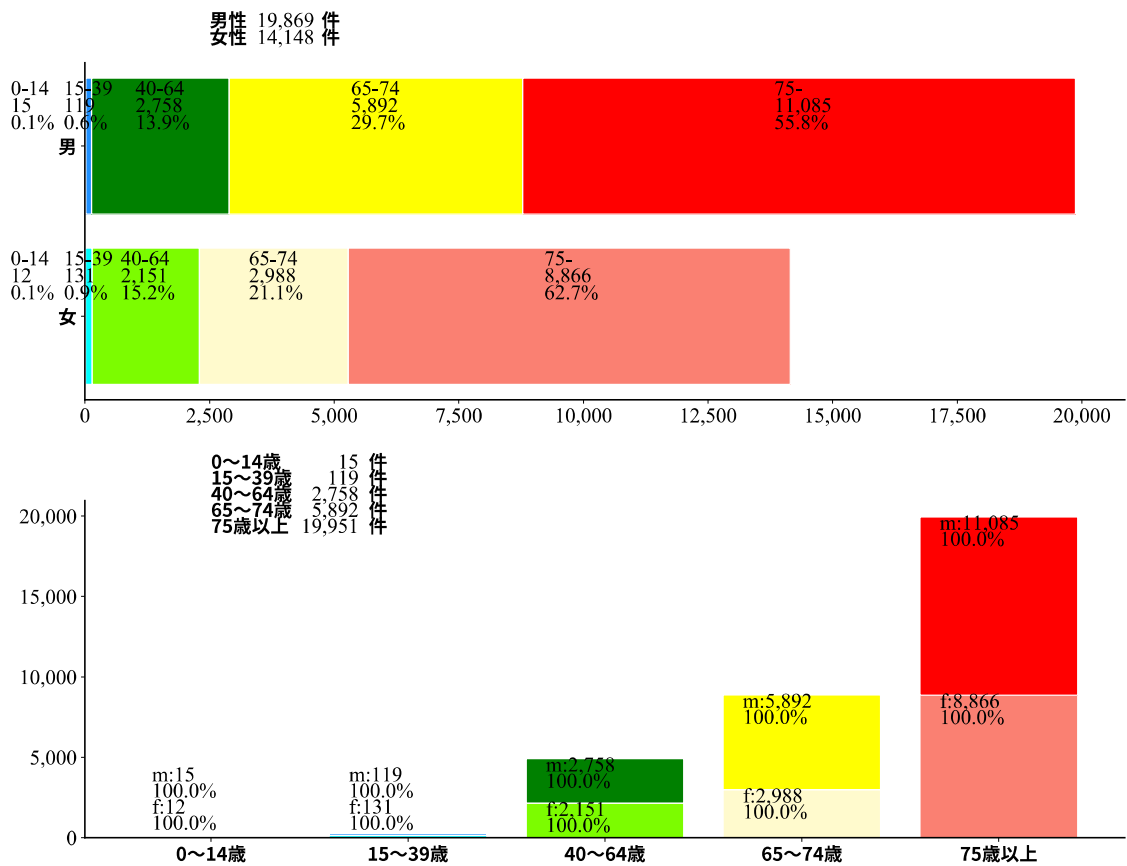


图2-15 部位別年齢階級別死亡率（2016年）：人口10万対

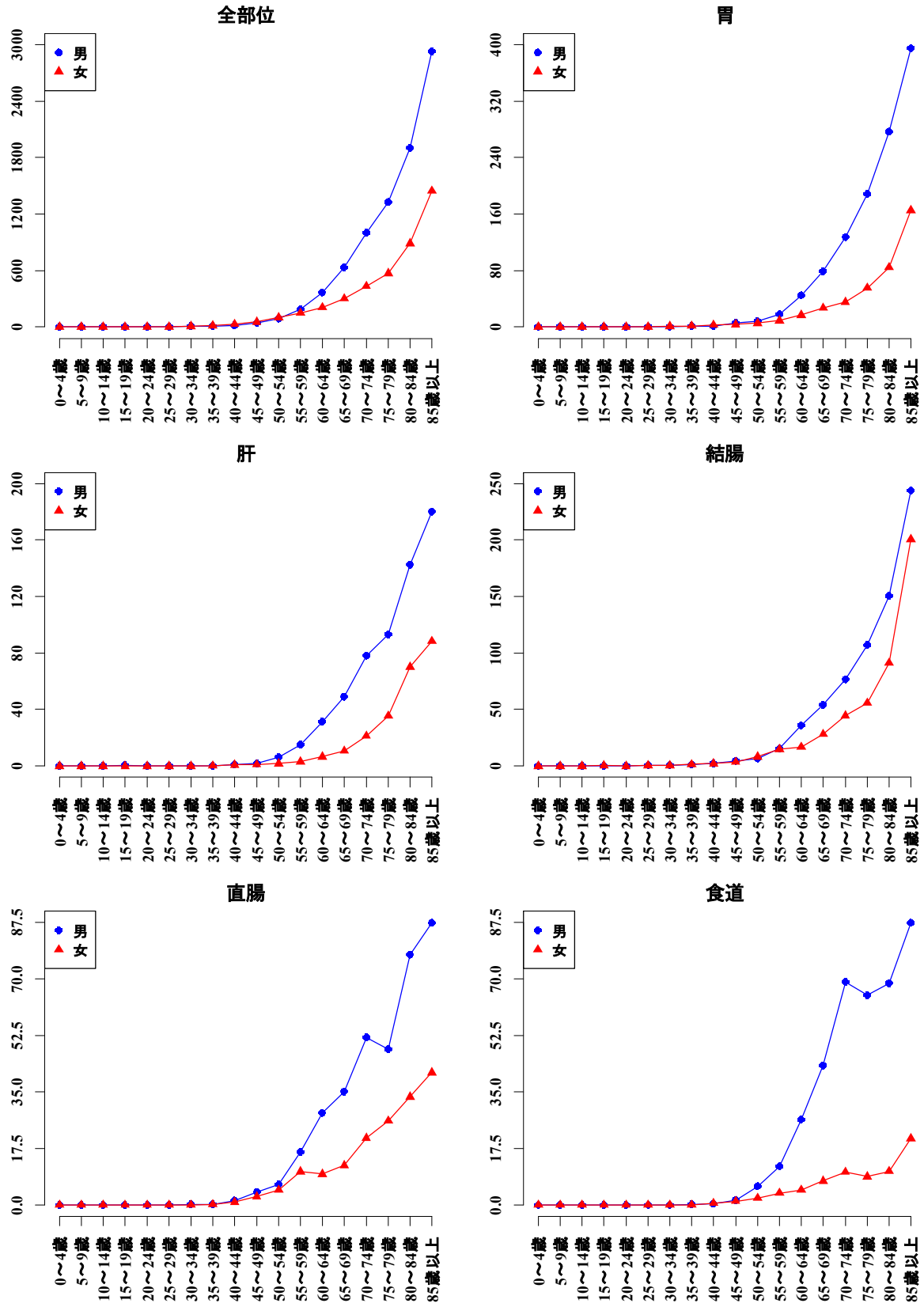
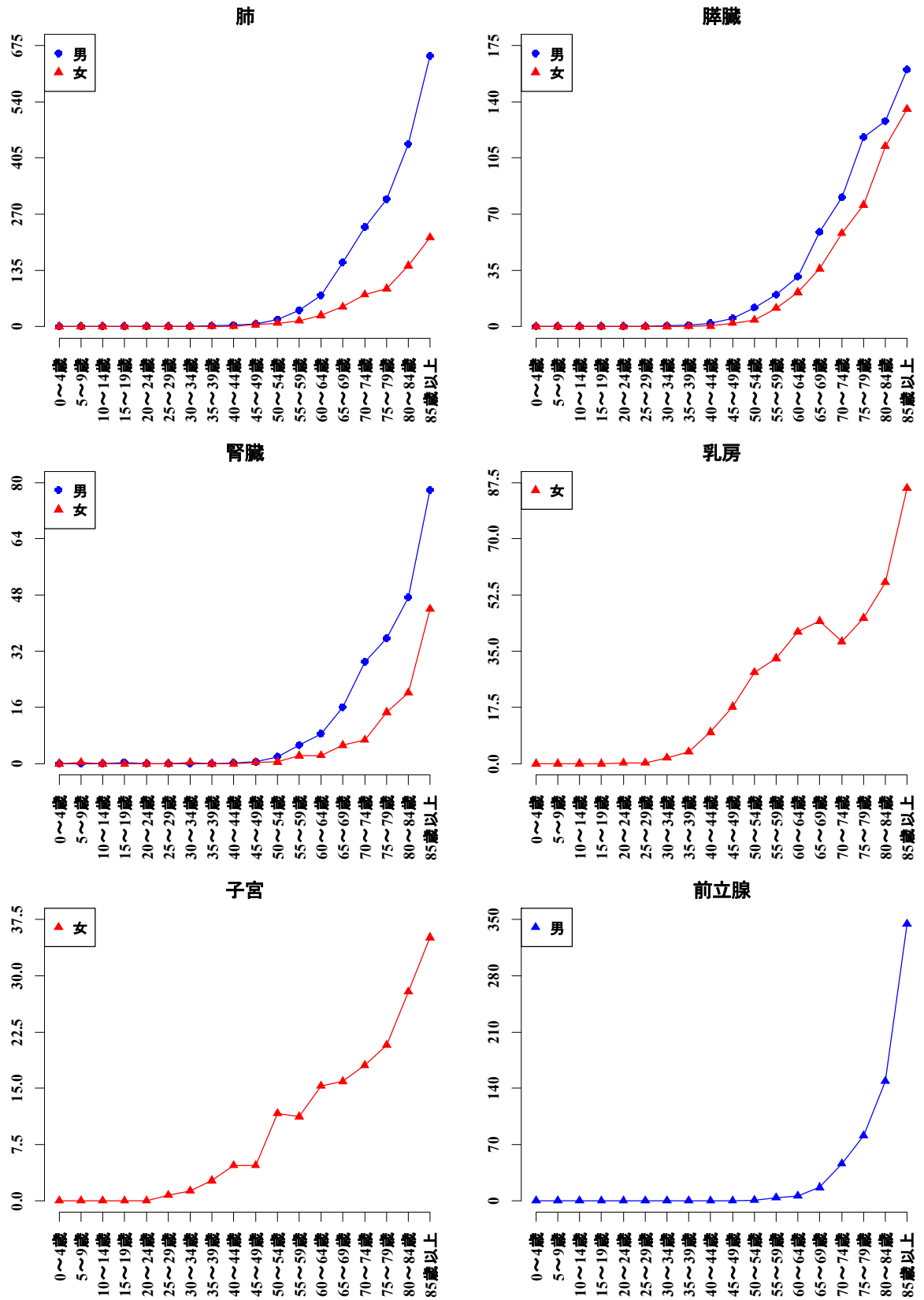


图2-15 部位別年齢階級別死亡率（2016年）：人口10万対（続）

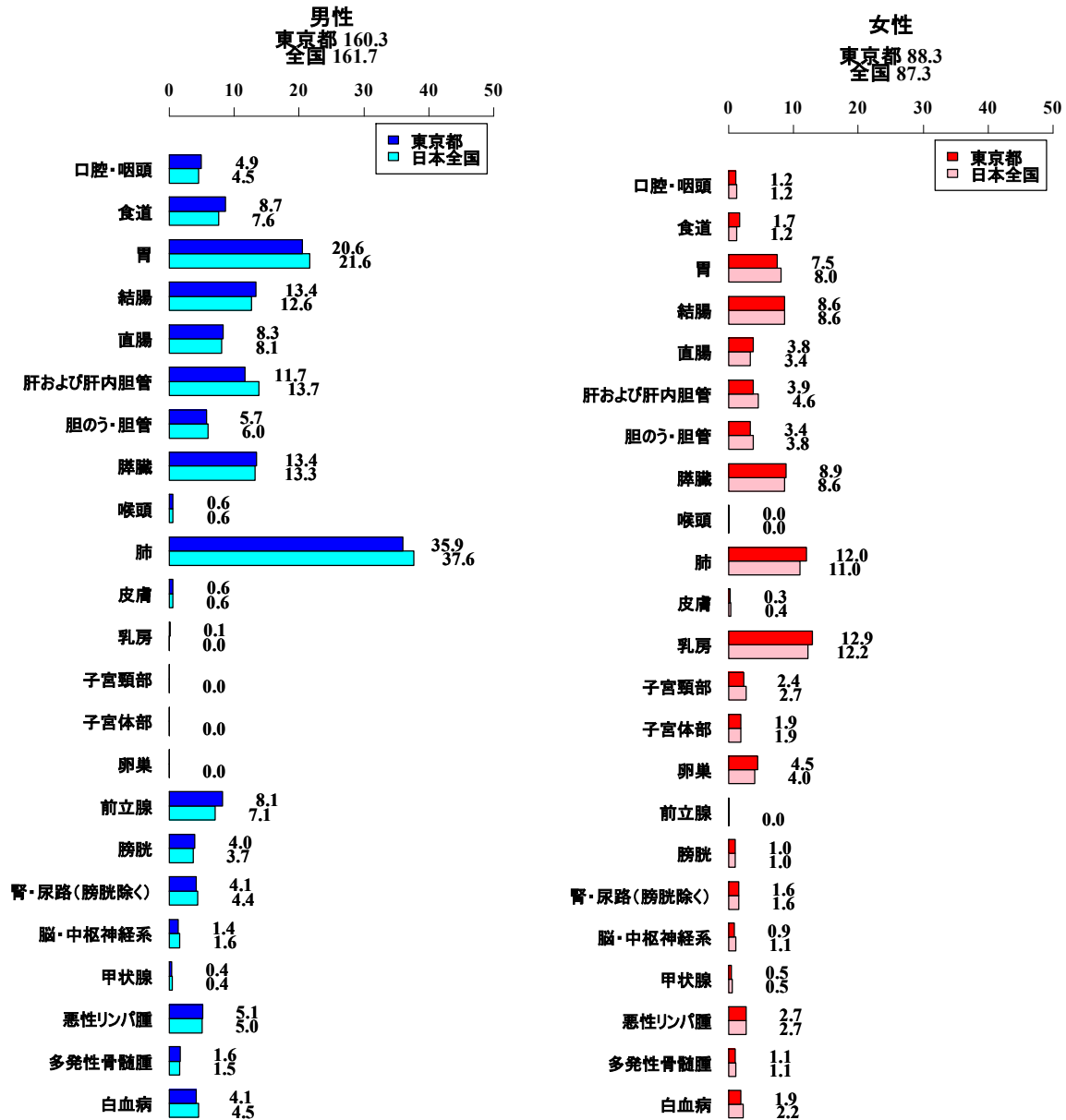


(3) 年齢調整死亡率（表3-9）

東京都の年齢調整死亡率（昭和60年日本人口モデル）は、人口10万人当たり、男性160.3、女性88.3である。全国推計値は、男性161.7、女性87.3である。

部位別では、男女ともに全国と比して概ね同様の傾向を示している。

図2-16 部位別年齢調整死亡率（2016年）：人口10万対（全国推計値との比較）



5. 区市町村別がん罹患（付表3-5-A）

区市町村別の比較は、人口の少ない地域を比較することになるため、年齢調整罹患率よりも標準化罹患比を用いるが、人口が極めて少ない地域や部位ごとの比較では1年分の数値としてはばらつきが大きいいため、今回は全部位について区部と多摩地域に限って、地図上に示した。全体として、多摩地区から都心部に向かうにつれて、標準化罹患比が高くなっているが、多摩地区でも中央部でやや高い傾向が見られている。

図2-17a区市町村別がん罹患 全部位(上皮内がんを除く) 男性 (2016年)

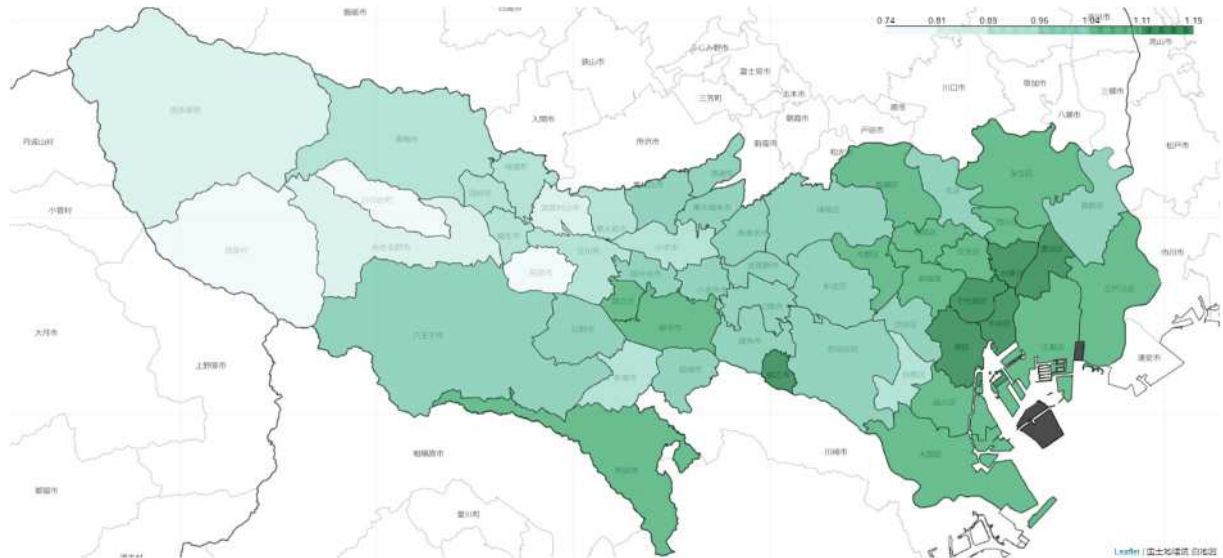


図2-17b区市町村別がん罹患 全部位(上皮内がんを除く) 女性 (2016年)

